

事業報告

2017年度子ども発達支援室事業報告

1. はじめに

子ども発達支援室の主たる業務は、関係諸機関との連携にもとづく地域支援である。具体的に2017年度に実施した業務はメンタルフレンド派遣事業、特別支援ボランティア派遣事業の2つである。これらの派遣事業では、多くの学生がボランティアとして、適応指導教室や小学校での支援に直接かかわっている。ボランティア学生へのきめ細かなサポートや関係諸機関との密な連絡が、学生自身の学びと、派遣先のニーズに合ったものとして、これらの事業をより充実させることにつながってきている。

以下に、2017年度の各事業の内容及び課題について報告する。

2. メンタルフレンドの派遣

1996年度から制度化された、不登校等児童に対する本学のメンタルフレンド派遣事業は、2017年度で22年目を迎えた。子ども発達支援室における派遣は、2009年度をもって家庭への個別派遣を終了し、2010年度より地域の適応指導教室等における集団活動への派遣と一本化された。

2017年度の主な派遣先は、引き続き依頼のあった、武豊町適応指導教室、半田市適応指導教室、本学付属高校の3か所であった。

a. 事業内容

学生への募集は、4月に学内の掲示板や講義などを通して呼びかけ、5月にはメンタルフレンド活動への理解を深めてもらえるよう「登録前の事前研修会」を2回行った（登録希望者はどちらか1回に参加）。事前研修会では、2008年度から各適応指導教室の先生にお越しいただいており、教室の雰囲気、活動に求めることなどをお話ししてもらっている。このような募集を通して、2017

年度は合計21名（男子学生2名、女子学生19名）の学生が登録した。

登録をした学生には、研究員がまず個人面接を行った。個人面接では、学生それぞれの個性を知るとともに、活動可能な時間、希望する活動形態などを確認した。更に、YG性格検査を実施し、より学生の個性を理解するよう努めた。これらの情報と、派遣先の特徴や要望とのマッチングを行い、派遣先を決定した。

2017年度の派遣状況を表1に示す。派遣した学生は合計12名（武豊町適応指導教室には2名、半田市適応指導教室には5名、付属高校へは5名）であった。2014年度まで派遣をしていた美浜町適応指導教室は、利用する生徒が不定期であることが理由で、2017年度もメンタルフレンドの派遣依頼を受けなかった。

それぞれの活動回数については表2に示すとおりである。

活動は基本的に毎週もしくは隔週のペースで、同じ曜日・時間帯に行った。活動を開始した学生には、活動日ごとの報告書の作成、更に定期的な（活動頻度にもよるが月に一回程度）個別のスーパービジョン（以下SV）を受けることを義務付けた。SVでは、報告書をもとに活動を振り返り、学生が感じる疑問や不安、気づきについて話し合い、指導を行った。2月には、「活動報告会」を開催し、活動する学生同士の体験からの学び合いを目指した意見交換を行った。

表1 2017年度メンタルフレンド派遣状況

派遣先	派遣人数
武豊町適応指導教室（武豊町字砂川）	2（女2）
半田市適応指導教室（半田市桐ヶ丘）	5（男1女4）
付属高校 学習室	5（男1女4）
派遣学生合計	12

* 登録者数21名

表2 2017年度メンタルフレンド活動回数

派遣先	活 動 回 数 (のべ)												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
武豊							2	5	3	2	2	3	17
半田	0	0	1	2	0	4	7	10	3	5	8	6	46
付属						7	13	8	12	11	3	0	54
合計	0	0	1	2	0	11	22	23	18	18	13	9	117

また、派遣先との連携を図るため、4月には、各適応指導教室の先生方に本学までお越しいただき、派遣人数や活動内容等の要望をお伺いし、意見交換を行った。

1月から2月にかけて、教員および研究員が各適応指導教室へ訪問し、教室内の子どもたちの状況や学生の活動の様子を現場の先生方からお聞きした。

b. 振り返りと今後の課題

2017年度も、多くの学生が、メンタルフレンドの活動に興味を持ち、登録を行った。そのうち派遣された学生は、12名であったが、スケジュール等の都合で活動のチャンスを得られなかった学生にも、活動報告会の参加を呼び掛けるなど、学びの機会を提供した。

派遣の開始時期については、これまでも各教室の状況を伺いながら、調整を行ってきた(表2)。

半田市適応指導教室は、2016年度に引き続き、派遣の開始時期を、継続と新規の2段階に分け、継続学生には、5月から活動を始めた。付属高校学習室、武豊町適応指導教室に関しては、生徒の利用状況に合わせ、後期から派遣を開始した。

学生たちは、教室の先生方とよくコミュニケーション取り、またSVで状況や感情を整理しながら、子どもへの理解を深めていくことができた。付属高校では、学習室利用生徒が少ない中でも、メンタルフレンドがその場に居続けることで、次第に心を開いて話をし始める生徒が多く、高校側からも良い評価をいただいた。半田市適応指導教室では、昨年度とは異なり、小学生の利用者が増えた。小学生から中学生までのそれぞれ発達段階が異なる集団に対して、全体の状況を把握しながらも、個々の個性に配慮し、生徒たちの活動を支える立場に努めた。武豊町適応指導教室では、利用生徒が非常に少なかったため、普段は先生と生徒の1対1になることも多く、年齢の近いメンタルフレンドと関わる機会は、生徒にとっ

て良い息抜きの時間になったという評価をいただいた。

SVでは、「メンタルフレンドとして、何かしてあげなくては」と一生懸命になりがちな学生に対し、何かしてあげようとするより、自分自身が自然体でそこに居続け、その場を楽しむこと、それが結果として、生徒たちの安心感にもつながることを伝えた。ゲームや会話の輪に入ろうとしない生徒にも心を配り、肯定的なまなざしで見守ることの大切さを、実践しながら学ぶ機会となった。対応の難しい生徒もいたため、どうやって関わって良いか迷う姿も見られたが、生徒の気持ちや背景を考えるとともに、その時の自分の感情を振り返り、活動を客観視できるよう手助けをした。今後も、子どもたちへの支援だけでなく、学生の成長のためにも、SVを受ける目的や意味をしっかりと伝えていきたい。

派遣先の先生方には、学生の活動はもとより、生活や進路のことまで大変温かく見守っていただき、2017年度の活動にも概ね肯定的な評価をいただいたように感じる。年度初めに行っているメンタルフレンド打ち合わせ会には、各適応指導教室の先生方、付属高校の教頭先生にご出席いただき、利用生徒の状況や問題点を共有するとともに、引き続きメンタルフレンド派遣の依頼をいただいた。

今後も、教室に通う子どもたちへの間接的支援と、学生の成長の両方を視野に、研究員として学生へのサポートをしていきたい。

3. 特別支援教育ボランティアの派遣

本事業は、何らかの配慮やサポートが必要な児童のいるクラスへ、学生ボランティア、いわゆる特別支援「学生」支援員を派遣するものである。2008年度から半田市教育委員会との協議の上試行され、2009年度より正式に開始されたものであり、2017年度で9年目を迎えた。2017年度の主な派遣先は、引き続き依頼のあった、

亀崎小学校、雁宿小学校、宮池小学校、半田小学校の 4 校であった。昨年度依頼のあった乙川東小学校は、遠方で、交通の便も悪く、授業のスケジュールを調整できる学生がいなかったため、派遣はできなかった。各小学校のニーズと学生の意向を考慮し、特別支援学級または通常学級での特別なニーズのある児童への支援を行った。

a. 事業内容

学生への募集は、メンタルフレンドと同様、4 月に校内の掲示板や講義を通して行い、5 月には、活動への理解を深めてもらえるよう「登録前のガイダンス研修会」を開催した。

このような募集により合計 21 名（女子学生 21 名）の学生が登録を行った。学生の講義等スケジュールを検討した結果、派遣に繋がったのは 19 名であった。派遣状況の詳細は表 3 に示すとおりである。

表 3 2017 年度特別支援教育ボランティア派遣状況

派 遣 先	派 遣 人 数 (名)
亀崎小学校	4 (女 4)
雁宿小学校	7 (女 7)
半田小学校	4 (女 4)
宮池小学校	4 (女 4)
派遣学生合計	19 (女 19)

* 登録者数 21 名

活動は基本的に、同じ曜日・時間帯に毎週行った。活動を開始した学生には、メンタルフレンドと同様、活動ごとの報告書の提出と、定期的な SV（活動頻度にもよるが月に 1 回程度）を義務付け、学生の活動状況の把握やサポートを行った。

また、2 月には「活動報告会」を行い、支援の必要な子どもに対する理解を深めたり、学生の不安や疑問を話し合ったりする場とした。同じ活動場所でも、普段は顔を合わせる機会が無いので、学生同士で率直な意見交換ができる貴重な機会となった。

新年度から派遣先との連携を図るため、4 月には、半田市内の小学校において、派遣先小学校の担当者、教育委員会担当者、子ども発達支援室の担当者の顔合わせを含めた打合せを実施した。この打ち合わせは 2011 年度からの試みである。派遣人数や活動内容など各小学校の要望をお伺いし、研究員からは、本事業の目的、また配慮をお願いしたい点について確認をした。

また、研究員が後期に 1 回、各小学校を訪問し、学生の活動の様子、対象となる児童の様子を伺い、問題点や改善点についてご相談させていただいた。インターンシップや教育実習とは違う、子ども一人ひとりのニーズに寄り添う活動であることや、SV を義務付けている目的など、本支援室からの派遣学生の目的や要望を再確認していただく場となった。本事業は地域支援という目的で派遣を行っており、派遣学生の中には必ずしも教員を志望しているものばかりでなく、社会福祉に貢献する職業を目指しているものもいることについて説明し、小学校内で児童との継続的な関わりが持てるような活動となるよう、お伝えした。

b. 振り返りと今後の課題

学生の活動に対して、今年度も概ね肯定的な評価をいただいた。小学校の先生方には、学生の熱意を温かく見守っていただき、現場の先生方のご指導の仕方を見せていただくことで多くの学びの機会をいただいた。

前年度、各小学校へ配慮をお願いした以下の 3 点については、引き続きお願いをした。

学生のクラスへの配置について

特別支援教育ボランティアとして、児童への理解を深めていくには、対象児童への継続的な関わりが望まれるため、できるだけ同じクラス、同じ児童を担当できるようにしていただく。

担任の先生に学生が質問する時間の確保

学生にとって、わからないことやまどったことが多くある中、担任の先生にお尋ねしたいがその時間がなかなか取れないのが現状である。その日のうちに質問できなかった時は、後日改めて先生のご都合を聞いてお尋ねするなど、工夫が必要である。

担任の先生が不在の時の活動について

特別支援教育ボランティアは、教員養成のためのインターンシップとは異なる目的で行う活動である。そのため、先生が不在な中で長時間クラスを任されるような場面は、学生に責任を負いきれない可能性がある。児童の安全も考え、必ず先生の監督の元で活動ができるようお願いする。

以上の点については、特別支援コーディネーター担当の先生の異動などがあるため、4 月の打合せ会で、共通認識を持つことが今後必要であると考えている。また、

コーディネーターの先生だけでなく担任の先生にも周知されているかどうかはその都度確認する必要があると感じた。今後も、このような年度ごとの働きかけは続けていきたい。

2017年度は、年度の途中で活動を続けられなくなった学生が3名いた。理由としては、学業等で時間のゆとりが持てなくなったことや学生本人の体調不良等であった。毎年若干名、子ども発達支援室と連絡が取れなくなる学生もあり、ガイダンス研修会やSVで伝えてきている必要最低限のルールを再度周知する必要性を感じた。

継続して活動する学生の中には、実習や就職活動などで、活動の頻度や時間を減らさなければならないケースも少なくなかった。そのような場合でも、小学校の先生方には快く対応をしていただき、午前のみあるいは午後のみボランティア活動をする学生も受け入れていただいている。また、長期休み中は、曜日や活動時間等を学生の希望と合わせて、受け入れていただいた。運動会や卒業式等の学校行事にも参加するように声をかけていただいている。

また、活動をしたいという熱意はあっても、交通費などの負担が大きいことから、毎週の活動を隔週に減らして行う学生もいた。交通費の負担が大きいという問題は、複数の学生から訴えがあり、引き続き検討していきたい。

活動報告会では、ある学生から「『子どもの勉強が進むように働きかけてほしい』という学校の先生からの期待を感じるが、うまく応えられなくて焦ってしまう」という報告があった。同じような思いを、他の多くの学生も感じており、全体で共有することができた。そして「教師」とは異なる視点で、生徒の気持ちに寄り添うという「ボランティア」としての役割をもう一度確認した。また、活動2年目の学生からは「不安だったことはやっていく中で少しずつ分かってきた」「毎週決まった時間に活動を行うことで、生徒たちと関係ができてきた」といった、継続することで理解が深まる経験談等が、活動1年目の学生にとって良いアドバイスとなっている。「きつい言葉を投げかけてきて、傷ついた」という学生には、他の学生から「自分を出せる関係となったからでは」、「活動した内容を記録しておく、うまくいかなかったときは、前回と違う方法でやってみようなど、気づくことがある」という意見が出るなど、お互いに研鑽しあう場となっている。

達成感は継続的な支援の先にあるものであり、今後も、

学生の活動をフォローしつつ、不安全感や不安感とも向き合えるようサポートを続けていきたい。また、学生が自分のできる範囲で活動が続けられるようにと、活動時間や活動頻度について臨機応変に対応してくださっている、各小学校の先生方へあらためて感謝しつつ、今後も誠意ある指導を心がけたい。

2017年度 子ども発達支援室構成員

子ども発達支援室長	瀬地山葉矢（子ども発達学部）
運営委員	堀 美和子（子ども発達学部）
	堀場 純矢（社会福祉学部）
	野村あすか（社会福祉学部）
研究員	河合 裕子
	伊藤奈津子